問題用紙（社会Ⅰ）

※解答に際しては別紙の解答用紙を用いること。

授業名（担当教員名）：社会Ⅰ（市野川容孝）
試験時間：60 分
※ 持ち込みは一切、不可

【1】以下の ① ～ ⑩ に入る最も適当な語句を、後の語群から選び、記号で答えよ。

社会学者のP・バーガーとT・ルックマンは、社会的存在としての人間の生を、三つの位相に分けている。その第一は ① であり、人間は他の高等哺乳動物と異なり、いわば（未完成のまま）生まれてくるがゆえに、その生活様式や生存のあり方を生後、自分自身で構築・獲得していかなければならないという事態をさす。しかし、人間自身が作り出す様々な生活様式は、ひと度、形成されると、個々人の意志や生を超えて、一つの客観的現実として存在するようになる。これをバーガーとルックマンは ② と呼ぶ。さらに、この客観的現実となった生活様式を、人間が他の人間とのコミュニケーションを通じて学習していく過程を、バーガーとルックマンは ③ と呼んでいるが、これは社会学で一般的に用いられる ④ という概念とほぼ同義である。

アメリカの ⑤ は、人間が社会性を獲得していく契機として、発話行為と遊戯に注目しながら、これらを通じて子どもは、徐々に他者の視点を内に取り込んでいくとし、この内面化された他者を ⑥ と呼んだ。この他者は、play（ごっこ遊び）の段階では、具体的で個別的なものだが、遊戯が規則を有する game に高度化するにつれて、次第に抽象化していき、 ⑦ という形をとるに至る。内面化された他者という視座は、フロイトの ⑧ という概念にも見られ、フロイトは、その形成を「エディプス期」と名づけた 3 歳から 5 歳の頃の子どもに求めた。

しかしながら、人間は、所与の規範をただ受動的に習得するだけではない。成長にともなって、所与の規範を反省的・批判的に吟味する能力もつちかわれるのであり、道徳性の発達過程を考察したコールバーグは、そうした段階を ⑨ と呼んだ。だが、コールバーグの見解に対して、 ⑩ は、彼の視座が、道徳の発達を「正義」の観点からのみ捉えるもので、それとは異なる方向性をもった「ケア」という視点が欠けていると批判した。

[a] ギリガン	[b] ワロン	[c] ミード
[d] ピアジェ	[e] ベルグソン	[f] 客体化（objectivation）
[g] 内在化（internalization）	[h] 社会化（socialization）	[i] 外在化（externalization）
[j] I（主我）	[k] エス	[l] 超自我
[m] me（客我）	[n] 一般化された他者	[o] post-conventional
[p] universalism	[q] 開かれた道徳	

【2】以下の ① ～ ⑤ に入る最も適当な語句を、後の語群から選び、記号で答え、かつ後の「問」に答えよ。

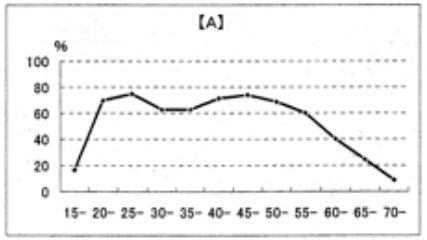
家族については、これを分析・分類するための社会学的概念がいくつか用意されている。G・P・マードックは、一組の夫婦とその子どもからなる家族を ① と定義し、これをもとにさまざまな家族形態を整理した。 ① が夫婦関係の軸で複数以上、連結した場合を ② と言い、親子関係の軸で複数以上、連結した場合を ③ と言う。また、 ① を子ども世代から見た場合を ④ と言い、親世代から見た場合を ⑤ と言う。

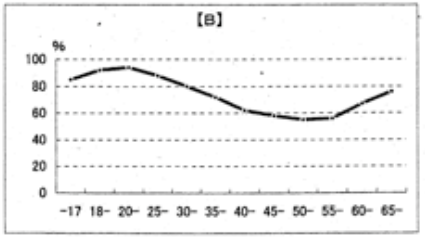
[a] 生殖家族（family of procreation）	[b] 妻居制（matrilocal）	[c] 複合家族（joint family）
[d] 複婚家族（polygamous family）	[e] 子居制（fililocal）	[f] 定位家族（family of orientation）
[g] 直系家族（stem family）	[h] 傍系家族（collateral family）	[i] 核家族（nuclear family）
[j] 双居制（bilocal）	[k] 拡大家族（extended family）	[l] 叔父居制（avunculocal）
[m] 夫居制（patrilocal）	[n] 新居制（neolocal）	

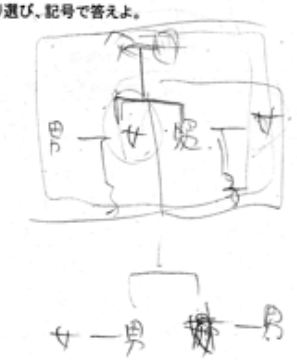
問 以下の（A）から（E）の家族形態を表現するのに最も適切なものを、同じく上の語群から二つずつ選び、記号で答えよ（同じ記号を何度、用いてもよい）。

（A）子どものうち長男だけが、一人の女性と結婚後も自分の実家で暮らす場合
（B）子どものうち娘たちだけが、各々一人の男性と結婚後も自分たちの実家で暮らす場合
（C）どの子どもたちも、一人の配偶者と結婚後、両親と離れて暮らす場合
（D）男性が一人の女性と結婚し、同じく一人の女性と結婚した妻の兄弟の家族と妻の実家で暮らす場合
（E）女性が一人の男性と結婚し、同じく一人の男性と結婚した夫の姉妹の家族と夫の実家で暮らす場合

【3】下のグラフA、Bは各々、何をあらわしたものか。後の[a]～[d]より選び、記号で答えよ。







[a] 日本（2005 年）における男性に比した女性の年齢階級別賃金率
[b] 日本（2005 年）における女性の年齢階級別労働力率
[c] 日本（2005 年）における男性に比した女性の年齢階級別労働力率
[d] 日本（2005 年）における女性の年齢階級別非就業率

【4】以下の［①］～［⑯］に入る最も適当な語句を、後の語群から選び、記号で答えよ。

マックス・ヴェーバーは、方法としての［①］を下敷きとしながら、宗教社会学を展開したが、その出発点となった著作は、言うまでもなく［②］である。この著作で彼は、タイトルの後半部分に相当するものの典型例をアメリカの［③］のテクストに見出しつつ、これに対立するものを［④］と呼んだ。ヴェーバーによれば、［③］が例示する思想の淵源は［⑤］に求められる。その独自の教理である［⑥］は、例えば1647年の［⑦］に見られるように、神はすでにある人びとを「永遠の生命」へ、他の人びとを「永遠の死滅」へと決定しており、しかも神のこの決定は人間によって知ることも、変更することもできないとした。しかし他方で、このような徹底的な不可知論が信者たちに与える不安を緩和する一つの手段として、絶え間ない［⑧］が提示され、これは上の不可知論と相まって、自分の資本を増加させることが各人の義務であるとする生活態度へと結実していく。この生活態度は、マルクスが述べた［⑨］の［⑩］への転化、すなわち異なる使用価値をもつ商品（生産物）を交換するための手段にすぎなかったものが、それ自身で量的成長を求めるものへと変化していくプロセスの対応物と見ることもできよう。

以上のような考察をふまえ、ヴェーバーはさらに、西洋文化圏以外の諸宗教を射程に収めた比較社会学に乗り出す。彼は、世界の諸宗教を少なくとも三つに分類した。第一は、もっぱら［⑪］を志向するものであり、その一例としてヴェーバーは儒教をあげ、それは［⑫］と結合したまま、伝統の不可侵性を導くとした。第二は、第一のものと異なり、もはや［⑬］に留まってはいないが、［⑭］に帰着するものであり、その一例としてヴェーバーは仏教をとらえた。第三は、上の［⑮］のように、［⑯］を追求するものである。ヴェーバーはさらに、第二のものに特徴的なものとして［⑰］を、第三のものに特徴的なものとして［⑱］を各々あげながら、両者を対比させている。

［a］貨幣	［b］模範預言	［c］使命預言	［d］資本	［e］現世への順応
［f］現世の合理的改造	［g］現世逃避的瞑想	［h］B・フランクリン	［i］J・アダムス	
［j］呪術	［k］ウェストミンスター信仰告白	［l］カトリシズム	［m］カルヴィニズム	
［n］メイフラワー契約	［o］プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神	［p］生産手段		
［q］労働力	［r］理解社会学	［s］ピューリタニズムの倫理と資本主義の精神		
［t］伝統主義	［u］保守主義	［v］職業労働	［w］二重予定説	［x］アニミズム

【5】以下の［①］～［⑯］に入る最も適当な語句を、後の語群から選び、記号で答えよ。

今日、私たちが例えば英語で単に **economy** あるいは **economics** と呼んでいるものは、18世紀のヨーロッパにおいて［①］と呼ばれるのが常であった。それは、**economy** の語源であるギリシア語が本来［②］を意味するにとどまり、国家社会の規模での経済（学）を意味するためには、それなりの修飾語が必要だったからである。この18世紀後半の経済学は、例えばA・スミスにおいて一つの明確な像を結ぶ。各人の自己利益の追求が［③］に導かれ、意図せざる結果として社会全体の繁栄をもらすというスミスの説は、もともとはフランスの重農学派に出自をもつ［④］という言葉と重ね合わせて理解されることが多い。

しかしながら、19世紀に入ると、スミスに代表される［①］には、さまざまな疑問や批判が向けられることになる。例えば［⑤］は、スミスの学説のフランスへの導入に努めた人物の一人だが、彼は、機械化にともなう失業の増大や、過剰生産としての恐慌という、資本主義経済の負の側面に、いち早く注意を向けた。また、イギリスでも［⑥］が、富の単なる増大ではなく、その適正な分配を考えることの必要性を訴えた。彼は、ベンサムの思想を継承しながら、富の平等な分配こそが社会全体の［⑦］を最大化すると説いたが、同時に、英語圏で最も早く［⑤］という言葉を用いた人物の一人でもある。さらに［⑧］という言葉を最初に用いたことで知られるフランスのコントは、経済活動の無制限の自由という考えを批判した。これら一連の疑問や批判は、ある共通した言葉を中心に編成されているが、19世紀にこの言葉に込められた意味は、今日でも、例えばドイツやフランスの現行憲法に見られる［⑨］という自己規定に継承されており、これは「福祉国家」とほぼ同義である。

［a］重農主義	［b］重商主義	［c］social science	［d］social economy	［e］political economy
［f］家政	［g］エンゲルス	［h］シスモンディ	［i］トムソン	［j］J・S・ミル
［k］レッセ・フェール（自由放任）	［l］社会学	［m］社会主義	［n］社会（的）国家	
［o］民主（的）国家	［p］見えざる手	［q］効用	［r］労働価値	

【6】20世紀の資本主義について、以下の用語（初出の際に［　　］で囲むこと）を少なくとも一度、用いて述べよ。英語での解答も認める。

恐慌	ケインズ	フォーディズム	消費社会
economic crisis	J. M. Keynes	Fordism	society of consumption

以　上